

政治と宗教

堀 黎 美*

Politics and Religion

Reimi Hori

In the recent several years, "Falun Gong" has become world-famous because of the heavy suppression by Chinese government during spring through summer, 1999. "Falun Gong" is now considered to a false religion just like AUM Supreme Truth in Japan. In China mass-media launched heated opposing campaign and people came to treat "Falun Gong" believers as criminals.

While, from the very beginning, socialism and religion run counter each other, why did "Falun Gong" suddenly emerge and spread like field fire in China in spite of frantic government crack-down? There must be motives peculiar to Chinese society. Recent Chinese novels may offer suggestive hints to such true cause.

始めに

ここ数年、具体的には 1999 年春から夏にかけて、中国政府の弾圧によって、逆に世界に知られることになった「法輪功」は「日本の「オーム真理教」と並び称される邪宗だ」とされ、現在もなお中国ではマスコミを先頭に、政府の意を受けた激しい反対キャンペーンが繰り広げられ、信者達は犯罪者扱いをされていると聞く。

筆者自身は宗教とは過去も現在も無関係なので、「法輪功」が果たして政府のいうように邪宗であるのかどうか、判断の基準を持たないのだが、「法輪功」とはその名前からも推測されるようにもともと気功を通じて身心を鍛練するのを目的とする集団で、その提唱者であり最高指導者とされている李洪志という人物の言によれば、「法輪功は気功を通じて、真善美を目指す集団であって、絶対に宗教ではありえない。」*4) のだそうである。

それが本当であるならば、なぜ政府は「法輪功」を「邪宗」として激しい反対キャンペーンを行わなければならないのか、憲法では信教の自由は一応保障されているにもかかわらず、排撃されるのはなぜなのか、そして国家権力の厳しい弾圧の中で信者は減るところか逆に増えているら

* 教養部

しいのはどうしてなのか、筆者はその点に非常に興味を覚えるのである。その原因は筆者が既に「支配からの離脱」で、予想しているごとく、現政権の政策は既に建前と現実の乖離を糊塗しきれなくなっており、人々もそれに気づいてしまったことにあると見る。つまり“法輪功”を代表とする気功などの流派、集団を政府のいうように宗教——邪宗である、とみなしたとしても、その存在を躍起になって消滅させようとしている、現政権自身がそういった集団への信者を増やしているという、皮肉な現象が見られるのである。その現象を招いていると思われるいくつかの原因を探ってみたい。

(一)

“バブル崩壊”と名づけられて以来、出口の見えない不況にあえいでいる日本と比較すると、マスコミなどで伝えられる中国の経済的な発展は目覚しく、中国脅威論さえ見聞きする昨今であるが、果たして中国は一人勝ちの経済的成功を収めているのであろうか。毎年夏を中国の地方都市で過ごす筆者の実感としては、国民の生活水準は確かに20年前、10年前より大幅に向上しているものの、中国全体が好況に沸いている状態では決してあり得ず、大都市及び大都市近郊農村の、一部分の繁栄の陰に置き去りにされていく人々の不満や不安が、当然のことながら、勝ち組、負け組の格差の開きに比例して、増大しているのが如実に感じられるのである。

中国は1949年10月のいわゆる新中国建国以来、社会主義を標榜してきたにもかかわらず、社会主義を支える基盤とされてきた労働者が、結果としては現在一番割りを食ってしまっており、とりわけ社会の中心を形成する五十才前後の労働者が、赤字国有企業の整理や私営企業への払い下げなど、国家の政策の転換により、どんどんレイオフやリストラをされているのであるが、この世代の労働者は、また成長期に文化大革命を経験させられ、従って基礎的な学力を身につけるのが困難だった世代でもあり、一旦職場を失えば新しい技能を習得して再就職するなど出来にくい立場にある。この世代はまた、進学期の子供を抱えており、自分達のこし方を考えれば、同じ不運、不幸を子供に繰り返させないためにも、子供には何とか大学以上の高等教育を、と目指す教育費の負担の重い世代である上に、そろそろ老親の介護も肩にかかってくる、平穩に暮らしていても、精神的、経済的に、一生のうちでも最も負担の重い時期でもある。

建国以来の中国の方式として、生活の全てを“単位”と呼ばれる勤務先に頼ってきたため、ひとたび勤務先から切り離されると、日常生活全般にわたって困難が生じる。労働者は退職すると退職金をうけることになるのが一般的だが、退職金は日本の退職金と異なり、日本の年金に該当し、在職時の何10%かを勤務先から月々支給される。福利厚生もすべて“単位”に依存してきたのであるから、退職後も“単位”が健全であればまだしも、“単位”自体が倒産などで解体されてしまった場合は受け皿がないのである。現政権は50余年の長きにわたって、国家を運営してきたにもかかわらず、中国には国家としての健康保険や国民年金の制度がないため、老人、向老期にある人、及びその家族はとりわけ大きな不安にさらされている。これまで就職した経験のない

者の医療費は100%自己負担、リストラされた労働者は医療補償があるが、それも“単位”の大小や職種、職歴によって差があり、例えば盲腸の手術などで数日間入院すれば、たちまち限度を超過し、いざという時のことを考えれば風邪や腹痛くらいでは、とても医者に診察してもらう気にはなれないと聞く。更に国民の70%を占める農民はその保障もなく、加えて金儲けを至上目的とする社会環境の中で、医療や教育関係者だけがそうした風潮に無縁でいられるはずもなく、その経営第一主義は、コネやバックのない庶民をますます苦しめる場合もある。ちなみに誠に卑近な例であるが、脳梗塞でかねてから療養中の夫が漢方的治療での好転を試みて、1998年に6日間ほど中国で入院したことがあるが、3人部屋で、治療内容としては、ほぼ漢方薬を日に数回飲まされただけに等しいにもかかわらず、四千元近く支払った記憶がある。この金額は地方都市の労働者の半年分の収入に匹敵するし、この入院も親戚の医師を通じてのものであるから、かなり優遇されたものだったと聞く。

こんな状況であるから、庶民の最大の不安は病を得ることであり、何人もの友人が「日常生活に十分注意を払い、とにかく病気にならないように気を付けている。」と筆者に告げている。彼ら彼女等は毎朝早起きして、地域の住民同士が集まって太極拳や気功、体操に勤しんでいる。ラジカセや指導者の掛け声に従って、集団で一定の動作をする——早朝の街でよく見かける中国の風景であるが、そこまでは“法輪功”などの信者達の修練と大差はないように、外国人である筆者には思える。そもそも気功などで身体の鍛錬をしている人が一応理論を持ち合わせているらしい“法輪功”などの信者になるのに、そんなに距離はなさそうである。筆者が思うに国民健康保険制度が整備され、ある程度安心して治療を受けられるようになれば、“邪宗”に走るものは自然に大幅に減少していくものと思われる。

(二)

人々が健康に対する不安から、病気を予防し、老化を遅らせるために運動をするのは先進国では多分どこでも見られることであろう。それが中国では伝統的な気功や太極拳の形をとる場合、気功集団と名乗っている“法輪功”などに接近するのは、特殊な事態とは考えられない。そうした形で“法輪功”やその他の“邪宗”と呼ばれている、他にもある流派の信奉者になっていくのは、いわば無知による——と言っては失礼だが、無作為の入信者とするならば、これは政府——共産党が反宣伝をすれば、“覚醒”する可能性も大きく、つまり“騙されて入信した善男善女”として対処しやすい。これに対して、政府——共産党が真に問題にしているのは“邪宗”の代表格である“法輪功”ならば、そのリーダーの李洪志の哲学に共鳴し、そこに精神の救済を求めて、意識的に入信していったものであろう。共産党の立場から見れば、“宗教は阿片（マルクス）”なのであるから、旧政権当時の旧社会に生きていた人が、現世のさまざまな矛盾から宗教に逃避せざるをえなかった、と見なして、信教の自由を憲法にうたったとしても、それらは次第に減少していくべきだ、というプログラムであったはずだ。それが逆に、ここ数年の宗教に心のよりどこ

ろを見出す人々の増加は、そのまま現政権への批判とならざるを得ない。歴史を見ても、宗教運動は古来何度も時の政権を打倒している国である。現政権がそれを危険視しないはずはない。

人民を妥当に統治し、社会が安定している場合、その政権も安定し、統治者が人民を恐れる必要はない。クーデターが起こり、それが人民の支持を受け、成功したとするならば、起こされた側に大きな失政があったと見なければならない。現政権が最も警戒しているのも、実にこの点にあるのは間違いない。なぜならば革命後 50 余年を経た現政権——反対党もなく、批判するジャーナリストの存在も許さない——には、たまりにたまったうみがあるのが誰の目にも明らかになってきているからである。とりわけ人民の怒りを買っているのが権力の座にあるもの、それに繋がる共産党幹部の腐敗、汚職であろう。これは実に自分達が内戦で勝利をおさめ、台湾に追いやった国民党政権末期の状況をしのぐ、と言われているのである。

(三)

ではその腐敗、汚職はどのように行われるのであろうか。

〇〇〇のポストで実権を握っていた△△△が×××万元、或いは億元を横領したというような具体的な事実は新聞、雑誌に連日報道されているし、例えば前北京市長とその息子の事件は“天怒”という題で小説化されたりしているのであるが、そのような事実に関する論評はすでに日本でもいくつか刊行されたため、筆者は中国の庶民の生活を描いた小説から、都市と農村の幹部の姿を紹介する。

都市幽霊＊1)

耿天麗 著 約50万字

この小説は、主人公（女、年齢40代後半、子供の頃父親が右派と認定され、強制労働キャンプに送られ、翌年死亡。その後続く文化大革命時に母も反革命分子として農村に追いやられ、そこで死亡）と彼女の昔からの友人高君英（市の婦人連合会主任で、両親とも市の大幹部の娘）をめぐる人間模様を描いている。登場人物も多く、ストーリーも非常に複雑なのだが、本の見開きに“この本の内容は全てが実情である”と記されており、この本の発売直後に読んだ筆者も、物語中の伝奇的な部分は別として、幹部のある典型——生態がよく描かれていると思った。で、副主人公とも言える高君英及びその母の輪郭を描いてみる。

高君英は自身の栄達のために利用できるものは全て利用する。だから、両親を失い、高君英の父親、高学深の保護を受けていた南聖華は子供の頃からいつも成果を高君英に横取りされてきた。物語の発端で二人は《婦女週報》という新聞を発刊するのだが、編集長に高名で評判のよい南聖華を据えたのは、実質的なことはすべて南聖華にさせて、新聞は自分の出世と広告などによる収入増加の手段にするつもりだからである。大きなホテルの支配人をしている夫との間に亮崽というドラ息子があり、副市長の肖瑞強とは長年の愛人関係にある。彼女は夫も愛人も真に自分を愛しているわけではなく、自分が大幹部の娘で利用価値があるからだ、というこ

とを知っている。夫も浮気を繰り返し、殆ど帰宅しない。彼女の母尹鳳玲は現役時代の権力の乱用を引退後も行使する女で、真の唯物論者を自認していて、前夫の死亡の際も葬儀を殆どしなかったほどなのに、腰痛を娘の部下の気功師に治療してもらってから、すっかり彼の言うままになって、怪し気な水を飲んだり祭壇を作ったり、迷信にとらわれてしまっている。また孫を溺愛し、孫の墮落の原因ともなっている。小説の始めの方で現在の夫高学深が路上で倒れ急死する。その原因は、異常に嫉妬深い尹鳳玲が家事を全然せず、病氣中の夫の身の回りの世話を、秋菊という地方出身の若い娘にさせていたのだが、彼女との間を疑って、夫を責め立て、怒った夫が外に飛出し、発作を起こして死んだのである。その夫の葬式を気功師の言うままに「革命以前の旧習通りにする」と言い出し、「それでも共産党员か」と娘を呆れさせる。尹鳳玲に「夫の死はお前の責任だ」と非道な詰問をされた秋菊は、精神に異常をきたして入院し、その入院中に憑依して、「尹鳳玲が高学深と結婚するために前夫を殺害した」と言って自殺してしまう。祖父の葬儀にも現れなかった亮崽はこれまでも賭博、無免許運転、婦女暴行などを繰り返し、祖母や母の権力でもみ消してもらってきたのだが、とうとう麻薬に手を出し、東北のある市で逮捕されてしまう。麻薬は中国では死刑である。高君英は自分の力の及ぶかぎりを動員して、息子の釈放をはかるが、他市でのことであり、この時ばかりは簡単にはいかない。あせった彼女は遂に暴力団のボスと手を組み、息子を奪還する。当然大きな違法行為を代償にしてである。しかし、そこまでして取り返した息子は、結局自分が飼っていた猛犬に噛み殺されて死亡、母親の尹鳳玲も前夫や秋菊の亡霊に悩まされたあげく、前夫殺しを告白して死に、これまでしたい放題をしてきた夫や愛人にも司直の手が迫っているのを知って、ショックで倒れた高君英はそのまま植物人間と化す。

一方、高君英の対極にある南聖華は、右派や反革命分子とされた両親の許に生まれ、幼い頃両親と引き離され、貧窮の中で育ち、さまざまな困難や誘惑に出会っても、健全な判断によって、身を誤らなかつたのは、道教の尼である遠縁の伯母（両親の実の姉ではない）の影響が大きい。彼女は70を過ぎた、無学ではあるが非常に聡明な女で、南聖華と弟の南聖然の実質的な母の役割を果たし、小説の最後に淡々と入寂する。南聖華姉弟が伯母の影響で仏教や道教を含む宗教に近づくような暗示は皆無であるが、伯母に守られて姉弟が生きてきた過程で、自然に不純物（例えば南聖然の妻）を払って明るい将来が予想されるストーリーは、換言すれば、政治によって、腐敗墮落した高君英と、宗教で守られた南聖華の対比とも言えよう。作者は決して宗教を賛美してはいないが、少なくとも作者の視線はそうに理解できる。

次に農村の例をあげると

民選＊2)

梁晓声著 約 35000 字

翟村では近々村で最初の村民の直接投票による村長の選挙が行われる。これまで村長だった韓彪が当然当選すると思われていたが、対立候補に復員兵の翟学礼が立ったので、翟老栓は彼に投票するつもりで家族にも伝えていた。それが正月明け、牛車に乗って農作業に出ようとして、峡谷にかかる橋を通った時、手すりの一部が破られているのを発見する。橋を渡った先に

は韓彪が請け負っている銀山があり、鉱石を運ぶ車が凍結のため滑って壊したらしい。翟老栓が周囲に散らばっている鉱石を拾い集めているところに、韓彪の甥、韓小帥がやってきて、「鉱石泥棒」ときめつけ、「警察に突き出すぞ」と脅迫し、抗弁する老栓の牛車を牛ごと谷底につき落としてしまう。そして、「この橋はお前が壊したんだぞ。」と言って、一万元の札束をつかませる。老栓は呆然として家に帰り、家族に事情を話すと、大金を目にした息子夫婦は韓彪の側についた方が有利だ、と考えを変えていく。韓彪は甥を使って、村民を次々を買収していく。やがて投票が行われ、韓彪の圧勝と思われていたにもかかわらず、結果は翟学礼が当選した。買収されながら、投票の際には自分一人なら分からないだろうと思って、翟学礼に投票した村民が大部分を占めたわけである。怒った韓彪側は翟学礼の家を襲って彼を殺そうとするが、学礼は銃で反撃し、韓小帥と彼のボディガードになってしまった老栓の息子を射殺し、警察に逮捕されてしまう。事態を知った老栓は事の理否を説明して、翟学礼を救出するために、村民を率いて警察に向かう……。

韓彪はもともと翟村の人間ではなく、元の村長が村のために雇った技師で、「山に鉱脈はない。」と虚偽の報告をし、事故を装って雇い主を殺し、その妻に取り入って夫の後釜に収まり、折からの開放政策で請け負う形で銀山を手に入れた上、村外から労働者を雇い入れて村民とし、元からの村民に対しては買収したり、弱みにつけこんで脅迫して、村長の地位を手に入れ、村の実権を一手に握り、好き放題をしてきた男である。

こういう悪どいやり方は小説の中だけと思いたいが、そうとも言えない。筆者が一昨年夏、上海や南京から汽車で2時間足らずの地方都市郊外を、土地のバスで小旅行した際、国道を走っていたバスが3、40人の村民に取り囲まれたことがある。噂に聞く略奪かと思ってひやりとしたのだがそうではなく、その地方のボスが私怨を晴らすため、バスの運転手を待ち構えていたのである。バスから引きずり出された運転手は皆に殴られ、止めようとした女の車掌も殴られたが、結局人違いだったらしく、ほどなくバスの運転は再開され、服をびりびりに裂かれてしまった運転手が、上半身素裸で運転するバスに乗り合わせる、という稀有な経験をしたのであるが、それより驚いたのは途中にいくつか警官詰め所があったにもかかわらず、運転手が何の報告もしなかったことである。理解できない筆者が、周囲の乗客にその理由を尋ねたところ、「警察はあいつらから金を貰ってぐるになっているのだから、通報したって、無駄だからさ。」という答えであった。

一党独裁で共産党が全てを指導する中国は、三権分立も明確でないから、閉鎖的な地域でその地方の権力者が悪事を働いても、一般人には手が出せない。もちろん小説の世界でも“梅次の故事”＊3)のように良心的な行政を目指す領導もいない訳ではない。

(四)

筆者の遭遇したような事件は取るにたりない小事ではある。しかし、決して僻地とはいえない

い人通りも多い白昼の国道において、公共バスの運転手を集団で襲って袋叩きにした原因が、そのバスの3番目の妻が数日前同じバスに乗った際、「細かいお金を切らしているから」との理由で、1～2元のつり銭を返してもらえず、ばかにされたから、と言うのであつては、そんな事のために30分～40分も待たされた乗客はたまったものではない。それに携帯電話を持っている乗客の誰一人、警察に連絡することもなく、面白そうに見物していたのだから恐ろしい。自分たちが同じ目に会ったとしても、助けてくれる人はいないのだ。そのバスがやくざなのか、或いはしかるべきポストにある者なのか不明だが、いずれにしろ大差ない地方は多数存在するのであろうし、人々は、国家権力を行使する部分でもある警察には何の期待もしておらず、人違いされた運転手も自分で自分の身を守る以外ないのだ、ということを目のあたりに見せられた事件であった。

小説は虚構の世界であるけれども、現実を反映することはできる。そして、中国は常に“事実は小説より奇”なる社会であるから、マスコミに公表される共産党幹部の汚職、職権濫用はひきもきらない。そしていかにも中国的——と言っては語弊があるならアジア的——と思えるのは、それら腐敗の原因を探れば、より大きな権力の背景がなければ、実行困難と考えられるにもかかわらず、摘発されるのは、互いの政争の具にされた場合以外、絶対に高い地位にある者、及びその縁者（中でも高幹子弟と呼ばれる高級幹部の子女達）には及ばない。

権力者の後盾もなく、病気や不当な暴力からも国の保護を当てにできない人民の大多数は自分の生活のために営々と働くほかはないのであろうが、大胆な一部分は犯罪すれすれ、或いは犯罪行為をしても金儲けに狂奔するし、弱い人間は宗教及びそれに類する集団に帰依し、精神の寄り所とすることは十分考えられる。

終わりに

中国は古来民衆の不満が積み重なったとき、宗教集団と結びついて、爆発した例が多い。だから、現政権が“邪宗”を極度に警戒し、“邪宗退治”に力を注ぐのであろうが、“邪宗”を社会の膿として処置しようと心がけるのであれば、まずその化膿の原因を取り除く必要がある。人民間の不公平な格差を少なくし、幹部の腐敗を防止するためにも、人民の教育水準を高め、三権分立を徹底し、野党の存在を保障し、ジャーナリズムを党の制約から解放して、もっと外部からの正当な批判は受け入れなければならない。人民間の不安、不満が減少すれば、“邪宗”に取りこまれる人も減少する。そういう形が望まれるのではなかろうか。

引用文献

- 1) 都市 幽霊 耿天麗 著 遠方出版社 1997 年 10 月第一版
- 2) 民 選 梁曉声 著 人民文学出版社 2001 年中篇小説 2002 年 1 月第一版
- 3) 梅次的故事 王耀文 著 人民文学出版社 2001 年 12 月第一版
- 4) 法輪功の正体——
最高指導者李洪志直撃インタビュー 角間隆 著 小学館 1999 年 11 月第一版

(平成14年12月5日受理)